

Recent development of Study on the locate
Dangyang (丹陽), the Capital of Ancient Chu (楚)
at West Zhou (西周) period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 満 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24296

楚都丹陽探索問題の行方

— 丹江口大ダム一帯の考古新知見によせて —

谷 口 満

はじめに

西周時代の楚国は丹陽に都城をかまえていたと伝えられているが、いわば楚族の故郷であるこの丹陽の位置については、古来さまざまな異説が並立していた。もっとも、従来はそのような異説の並立が意識にのぼることはあまりなかったらしく、三峡の丹陽、現在の行政地理でいえば湖北省旧秭帰県城（帰州城）の東方、長江の北岸にある丹陽城がそれであるというのが、いわば常識的な理解となっていた。

ところが、1970年代後半から、考古新資料の増加にともなって楚史・楚文化の研究がにわかには活発になってくると、この異説並立の問題が学術的に大きくクローズアップされ、議論が紛々として一種の論争状況が出現することになった。どれほど多くの学説が並び立ったかについては、羅運還氏の『楚国八百年』や劉玉堂・高介華氏の『楚国的城市与建築』に詳細な整理と解説があるが、基本的には次の三つの学説に大別することができる。

- ①秭帰説。湖北省旧秭帰県の丹陽城にあてる、旧来の通説を継承した学説。
- ②枝江説。湖北省旧枝江県の丹陽聚にあてる、旧来の異説を継承した学説。
- ③丹淅説。秦嶺から東南流して丹江口で漢水に流入する丹江の下流、河南省淅川県一帯にあてる、旧来の異説のなかでも比較的新しい異説を継承した学説。

つまり、考古新資料によって旧来の諸説とまったく関係のない新たな学説が登場したというわけではなく、結局は文献伝承に基づく以前からの諸説を継承する学説が、考古資料の導入という近年の資料状況を通過して、再び新たに並立することになったのである。一見して明らかのように、①・②は南方説、③は北方説であり、結局この対立は、楚国を形成した楚族は本来長江中流域の土着種族なのか、あるいは北から南下してきた外来の種族なのかという、古くてしかも新しい楚国形成史における最大の問題をそのまま反映していることになろう。

さて結論的にいうならば、葛州ダムや三峡大ダムの建設などともなう発掘・調査によってもたらされた、三峡地区における大量の考古新資料は、①の秭帰説を葬りさることになりつつある。南方説を支持する研究者たちは、この考古新資料の発現に大きな期待をよせたであろうが、残念なことに期待は裏切られて、西周時代の三峡地区で活躍していたのは、どうやら楚族以外の種族であったことがしだいに明らかになってきてしまったのである。②の枝江説も同様で、この説の正しさを裏付ける考古学的証拠は、今までのところどう見ても皆無に等しいといわねばならない。いきさつは徐少華氏の「楚丹陽地望及其考古学分析」（王光鎬主編『文物考古文集』武漢大学出版社1997年）に詳しいが、文献伝承に基づく旧来の歴史地理上の通説が考古資料によって否定されていく好個の実例を目の前にして、資料といえはほとんど在来の文献

伝承のみであった時代に育った年配の歴史地理研究者たちにとっては、まさしく隔世の感をいだかざるをえない事態が到来したわけである。

したがって、期待は③の丹淅説が考古新資料をえて定説化することにかけているというのが、現在の楚国歴史地理研究がおかれている状況である。もちろん、考古新資料によって歴史地理上のある学説の正しさが決定づけられるというのは、そうそう容易になしとげられることではないであろうが、ただ、この丹淅説についていえば、丹江口大ダムの水位上昇にそなえて緊急に試みられた発掘と調査によって出現した考古新資料が、きわめて有効な新証拠となる可能性が高そうなのである。楚国歴史地理に関心をもつものにとって、その有効な新証拠が何であるかは気になってしかたがないところであるにちがいない。

それらの新証拠がすべて公開されているわけではない現時点で、何らかの見込みを提示することにはいささかためらいもあるが、いち早く新資料を紹介したいという誘惑にも抗しがたく、以下にあえて紹介の一文を草したいと思う。それに以下に紹介する情報には、現地の研究者から直接口頭で得たものが多く含まれており、楚国歴史地理研究仲間のそういった好意にこたえて、その情報をなるべく早く公開することは、楚国歴史地理研究にたずさわってきたものの義務であり特権であるとも思うのである。

一 丹江流域における楚式鬲の発現

問題となる湖北省・河南省・陝西省・河南省・湖南省からは、西周時代の遺跡と遺物がそれぞれ大量に発現しているが、しかしそれらのうちどれが楚族の遺跡でどれが楚族の遺物であるかを直接判定する手段、つまり同時代の手段は実はなにもない。丹陽とか楚とか荊とか、あるいは楚族の先君の名とか、そのような名詞をもった西周時代の有銘器物でも見つければ話は別であるが、それはとうてい見込みそうにもないであろう。ということは間接的な手段をもって判定せざるをえないということであり、その間接的手段とはいっても第一に、西周楚文化の次にくる春秋楚文化の要素でなくてはならない。もちろん春秋楚文化の次にくる戦国楚文化、あの華麗な戦国楚文化の要素を手段とすることも可能ではあるが、なにせ五百年という時間の経過があるのであるから、そこには楚文化の大きな変質を考えねばならず、大きく変質してしまった様相から変質前の様相をうかがおうというのは、きわめて困難なはずである。そうではなく、時代がとなりあって変質の度合いがもっとも小さい春秋楚文化の要素から西周楚文化の要素かどうかを判定しようとするのが、とるべき順序というものであろう。

ところがその判定手段として春秋楚文化から何を取り上げるかとなると、実はこれがまたきわめてやっかいである。春秋楚国の領域内から発現するすべての遺跡と遺物は、楚国の人々のものであるという意味においては、ともかく春秋楚文化の要素ではあるけれども、しかしそのほとんどは判定手段としては役に立たない。いうまでもなくその様相が殷文化や周文化や、あるいは晋文化や齊文化や秦文化と大同小異で、それをもってある西周時代の遺跡や遺物の民族系統や文化系統を判定しようとしても、はたしてそれが楚族のものなのか楚文化のものなのか、それ以外の系統のものなのか、判定しようがないからである。つまり、この場合手段とな

るのは、春秋楚文化のみにしか見えない楚文化独自の要素、それもできれば西周楚文化の要素をほぼそのまま引き継いでいると予想される要素でなければならないが、春秋楚文化の考古資料を一瞥すれば、そのような要素は意外にもほとんど存在しないという現実ですぐ気づくことになる。考古資料が飛躍的に増加したとはいうものの、この点に限れば、資料はまだ寥々たる状況であるといわねばならない。

この資料状況のなかにあつて、春秋楚文化のなかからどうしても一つだけ要素を取り上げるとすれば、それはおそらくいわゆる楚式鬲において他はないであろう。楚式鬲とは、器形・製法において殷式鬲や周式鬲とは一見して異なった楚文化の独有器で、楚国の腹地である荊州地区を中心に領域内の広い地域から出土し、しかも春秋戦国時代を通じて盛行した、まさしく楚文化の指標器に他ならない。ことに春秋時代のそれは、器形の典型さといひ楚墓発掘の際に出土する頻繁さといひ、いやおうなしにまず第一に目に飛び込んでくる春秋楚文化独有資料なのである。西周時代の遺跡や遺物がはたして楚族のものかどうかを判定する場合、多くの研究者がその判定手段として春秋楚式鬲をもちだすのは、この独有性と出土状況の普遍性によるものであり、そもそも判定手段としてこれに匹敵する有効さをもった考古資料は、これ以外にほとんど見あたらないのが実情だからである。楚族の故郷である西周時代の都城丹陽を探索する作業が、方法としてはもっぱら春秋楚式鬲の起源地を探索するという作業、つまり春秋楚式鬲の前身としての西周楚式鬲の発現地を探索するという作業で試行されているのは、以上のような理由によっているのである。

したがって西周楚式鬲の発現地をめぐる近年の研究状況をまず紹介したいと思うのであるが、それに先だつてやはり、楚式鬲とは何かという基本的な問題についていささか説明しておかねばならない。春秋戦国の楚墓から殷式鬲や周式鬲とまったく異なった陶鬲が出土していることに注意をうながし、これが楚文化の淵源と形成及びその特色の研究に不可欠な資料であることを指摘したのは、周知のように蘇秉琦氏である（蘇秉琦「従楚文化探索中提出的問題」『江漢考古』1982年1期）。その指摘は、武昌で開かれた中国考古学会第二次年会の閉幕講話のなかでなされたものであり、学界のリーダーであり、しかも宝鷄鬲台出土の瓦鬲を資料に周文化淵源探索研究に先鞭をつけた大先輩からの指摘なのであるから、楚文化考古研究者に大きな影響を与えたことは想像に難くない。事実、その直後から楊權喜氏の「江漢地区楚式鬲的初步研究」（四省楚文化研究会編『楚文化研究論集・第一集』）をはじめとして、楚式鬲をとりあげた研究が次々と登場することになるのである。

蘇氏が楚式鬲に与えている定義は次のようなものである。①殷式鬲や周式鬲においては腹の部分がまた足の部分でもあり、腹足一体となっているのに対して、楚式鬲においては腹と足の部分をはっきりと別になっている。②襠（また）の部分についてみると、殷式鬲では両側にはっきり分かれており（分襠）、周式鬲ではつながってはいるがきわめて寸詰まり（癩襠）であるのに対して、楚式鬲ではつながってしかも左右に大きく開いている（連襠）。③典型的な楚式鬲の製法は、器体と足を別々に作って双方をつなぎあわせ、腹のほうから下へ押しつけるとともに、外側から補強の土を貼りつけて、固く接合させるというものである。

この定義を念頭において、実例をかかげてみよう。図1は江陵雨台山楚墓出土の陶鬲、図2①②は当陽趙家湖楚墓出土の陶鬲である。図1の3・4・5・7・8・9、図2①の3・4・5・6・7・8・9・10、図2②の1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11、大口と小口の違いはあるけれども、これらがすべて殷式鬲や周式鬲とは截然と区別される典型的な楚式鬲であることは、誰しもが認めるところであろう。もちろん定義を十分に満たしている。ところが、図1の6、図2②の12・13・14・15・16は定義にあわないばかりか、甗鬲の周式鬲にきわめてよく似ている。典型的な周式鬲にくらべて鬲の開きがやや大きいように思うが、周式鬲か楚式鬲かと問われれば、まちがいに周式鬲に属するといわねばならない。楚国の腹地のなかでも代表的な楚墓区である雨台山や趙家湖からなぜ周式鬲が出土しているのか、理由づけに苦しむのであるが、次のような事情を考えれば、これは楚墓出土陶鬲における例外的現象とみるべきであろう。

- 一．典型的な楚式鬲にくらべて、その出土数は無視できるほど少数である。
- 二．図1の6は戦国早期、図2②12・13は戦国中期早段、同じく14・15・16は春秋晚期晩段に編年されていて、出土するこの周式鬲は春秋晚期晩段から戦国中期早段という特定時期のものに限られている。

おそらく何か特別な事情で、一時期一部の楚墓に副葬されたものにちががなく、楚式鬲の範疇からも、楚式鬲についての議論からも除外してよいと思う。

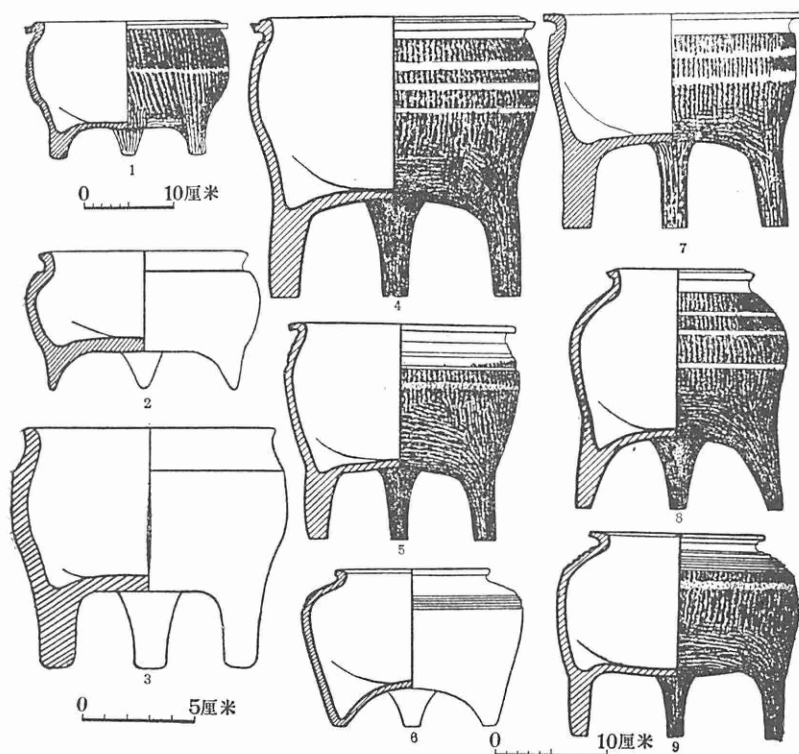


図1 湖北省荊州地区博物館『江陵雨台山楚墓』(1984年・文物出版社) 図四五。

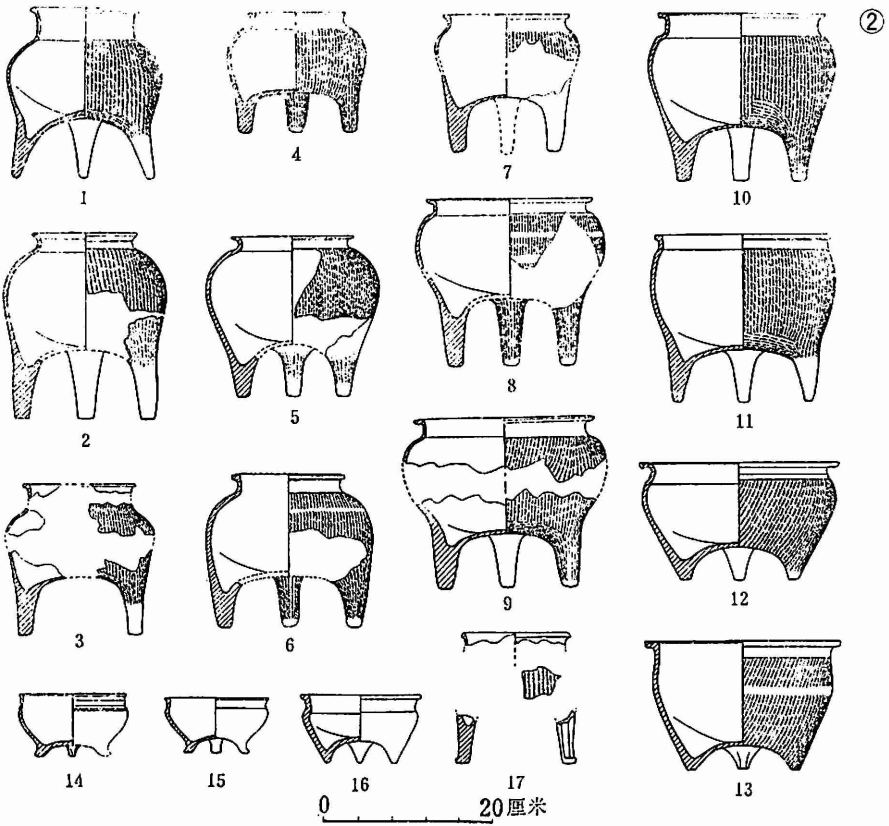
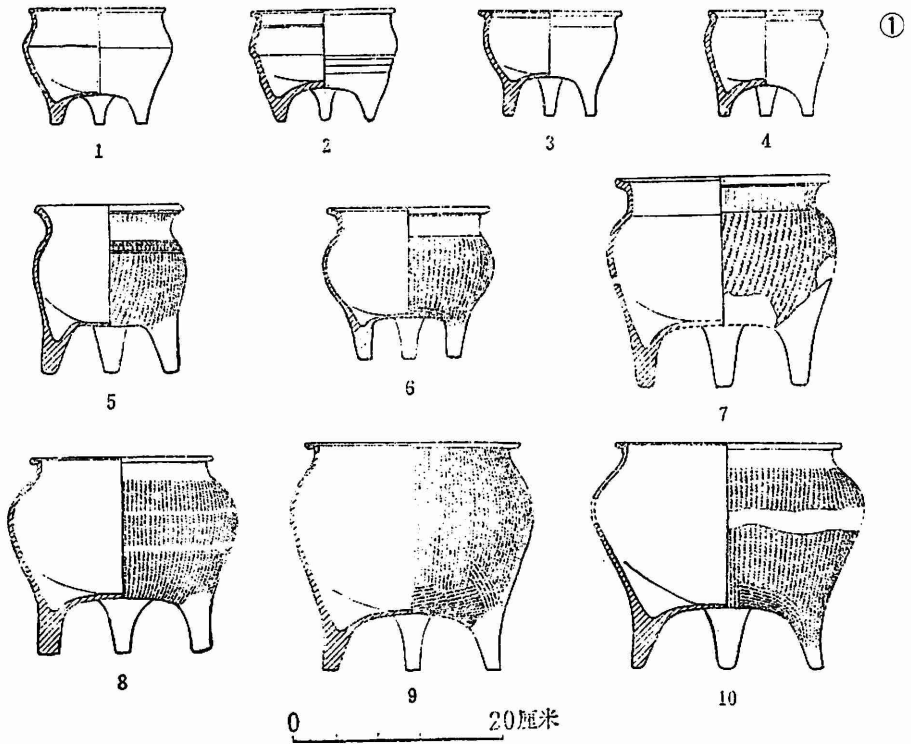
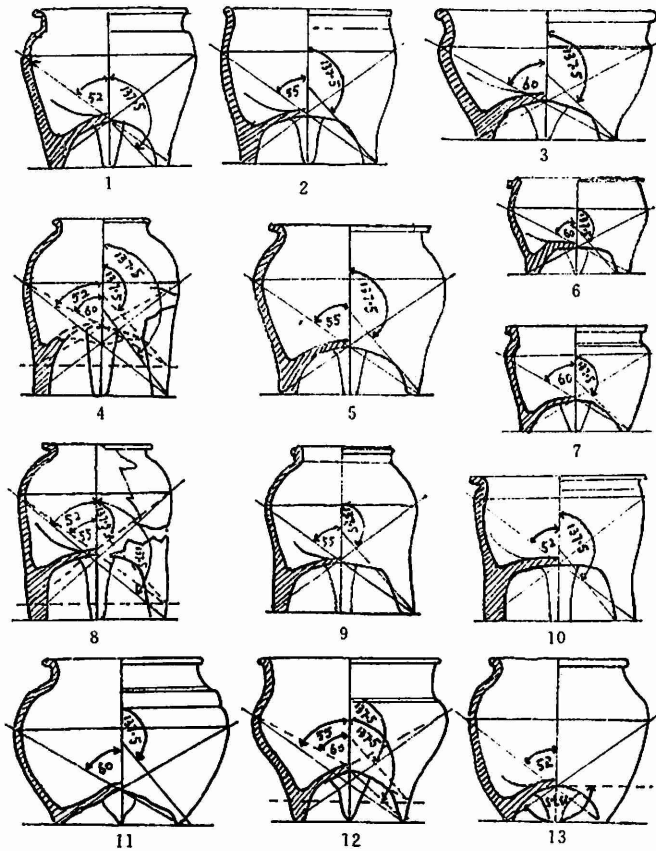
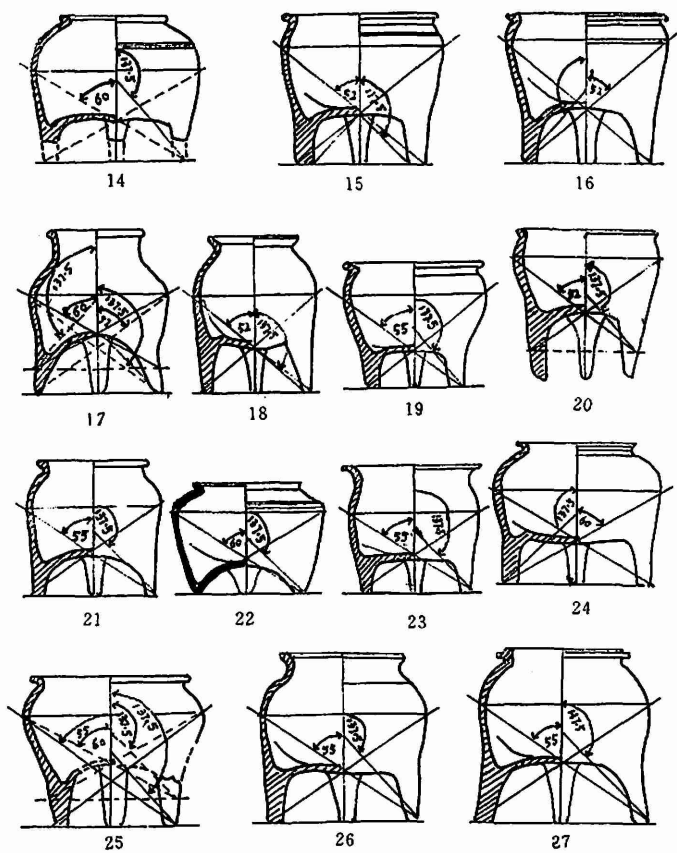


图2 ①湖北省宜昌地区博物馆·北京大学考古系「当陽趙家湖楚墓」(1992年·文物出版社) 图五四。②同书图五五。

問題は図1の1・2、図2①の1・2である。この4器は確かに定義を満たしてはいるが、典型的な楚式鬲にくらべて足が短かくしかも小ぶりで、これを楚式鬲とみなしてよいどうか、躊躇させるものがあるからである。しかし、襠が大きく開いている特徴をはじめとして、この陶鬲の形状はやはり楚式鬲のそれであり、周式鬲に所属させることはとうてい無理なはずである。この点については、彭明麒氏のユニークな研究が一つの参考となろう（彭明麒「江汉楚日用陶鬲構成模式初探索」王光镐主编『文物考古文集』武汉大学出版社・1997年）。図3は彭氏論文に付載されているものであるが、彭氏は楚国領域内から出土する陶鬲の構造を解明するにあたって、腹の最広部の直径と両足の外側部分から外側部分までの長さ、という二つの線分をとり、この二つの線分を上底・下底とする台形を設定し、その対角線を引いてみたところ、ほとんどの場合その交点は襠の中心点と重なっていると指摘しているのである。また上下の中心線と対角線からなる角が、これもほとんどの場合、60度かもしくは52度前後のいずれかであり（図4 - 彭氏論文付載図）、楚国領域内の陶鬲はこの二つのタイプに大別されるとも指摘している。52度前後のタイプが典型的な楚式鬲であることは一目瞭然であり、今問題の周式鬲に似た楚式鬲がいずれも60度のタイプに属することもまた一目瞭然であろう。3・6・7がそれであ



1. 赵・金 M15:3 2. 赵・李 M3 3. 赵・金 M35:2 4. 赵・金 M81 5. 赵・金 M2 6. 雨・M24:1C 7. 纪・河 I ③:3 8. 纪・河 J111:6 9. 雨 M59:1D 10. 雨 M487BW 11. 毛坪 I 式(M1) 12. 毛坪 I 式(M16) 13. 信阳长台关 21



14. 紀・台 J11:6 15. 雨 M539:3BⅠ 16. 雨 M83:2BⅡ 17. 趙・鄭 M6 18. 紀・龍Ⅰ①:1 19. 紀・西 T⑤:1 20. 松・M32:6 21. 紀・廟 M4:5 22. 雨 M188:1E 23. 陝宝 M7:8 24. 雨 M496:2DⅠ 25. 趙・金 M107 26. 紀・傅 M1 27. 紀・松 T1-5

図3 彭明麒「江漢日用陶甬構成模式初探索」(王光鎬主編『文物考古文集』1997年・武漢大学出版社)。

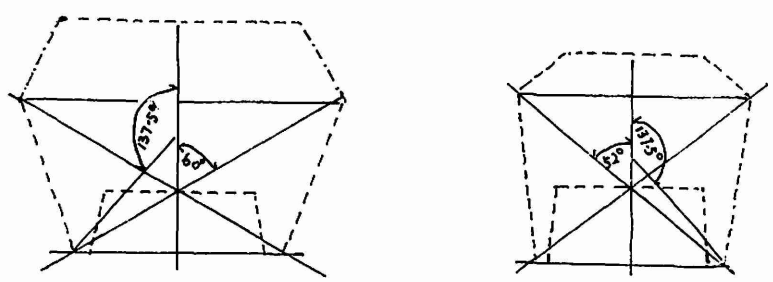


図4 彭明麒「江漢日用陶甬構成模式初探索」(王光鎬主編『文物考古文集』1997年・武漢大学出版社)。

り、それぞれ趙家湖・雨台山・紀南城出土から出土したものである。そして、52度前後タイプはもちろん、60度タイプも楚式甬であるというのが彭氏の結論であり、3・6・7はいずれも基本的に楚式甬の定義を満たしており、しかも楚国腹地の代表的な墓区や都城遺跡からの出土なのであるから、彭氏の結論にまちがいはないであろう。

それに実は図3は、楚式鬲生成過程の解明にきわめて重要なヒントを提供してくれている。11・12は浙川毛坪、13は信陽長台関、つまり河南省最南部という、西周時代はもちろん、それ以降においても大勢として周文化の影響が強かった地域からの出土である。11の陶鬲などはどうみても周式鬲であるし、13もやはり周式鬲とみるのが妥当であろう。彭氏が11・13をどちらと考えているのかははっきりしないが、この2器は周式鬲であり、楚国領域内であるとはいえ、地域からいえば周式鬲が出土しても何も不思議ではないのである。

一方、11と同じく浙川毛坪からの出土であるにもかかわらず、12はまぎれもない楚式鬲である。そこでこの二つの陶鬲をじっと見比べてみれば、11の下底の長さをそのままにして長い足をつければ52度タイプの楚式鬲12になり、また11の60度を保ったままで襠の大きく開いた連襠にすれば、60度タイプの楚式鬲3・6・7になることが容易に推測されるであろう。13の場合もそうであって、これはすでにおよそ52度の角度をもっているのであるから、足と襠の部分に変化を加えれば、典型的な楚式鬲5にもっていくことが可能というものである。要するに楚式鬲とは、52度タイプの典型的なものであれ、60度タイプの短足のものであれ、周式鬲を變形させることによって生成されたものだと想定されてくるのである。このことは、楚式鬲の生成が周式鬲が盛行している場所からそう遠くないところではじまったことを予想させるが、ここでは周式鬲を變形させて楚式鬲が生成された可能性だけにとどめて、その詮索までは踏み込まないことにしたいと思う。

楚式鬲が発生したのちも、典型的な周式鬲はその典型性を維持したまま、かなりおそくまで各地で流行していた。先にあげた兩台山や趙家湖から例外的に出土している、春秋晩期～戦国中期早段の周式鬲はその一例である。典型的な周式鬲が依然として流行している一方で、それとは形状・製法の異なった楚式鬲が発生し、それが楚国の腹地を中心に広く通行するようになるのであるから、たとえ周式鬲から變形して生成されたものとしても、それは楚式鬲であって周式鬲では決してない。典型的周式鬲とは明らかに異なった製法によって作られ、明らかに異なった形状をもち、しかも楚国の腹地を中心に通行したというこの意味において、52度タイプの楚式鬲はいうまでもなく、60度タイプの楚式鬲も純然たる楚式鬲に所属させなければならないのである。

さて、周知のように楚式鬲の起源地をめぐる問題は、これを楚国の腹地＝荊州地区であるとみるか、そうではなく起源地はまったく別の地域であり、そこから荊州地区に流入したものであるとみるか、という二論対立の様相から研究がはじまった。具体的にいえば、楚式鬲は荊州地区から北上して襄樊地区にいたったものか、そうではなく逆に襄樊地区から荊州地区に南下したのか、という形となって一種の論戦がはじまったのである。結論的にいえば、襄樊地区の考古資料が後者を強力に後押しすることになり、今日では後者の考えが定説化しつつあるといっていよいであろう。ただ、だからといって襄樊地区が楚式鬲が発生した楚式鬲の起源地であると決まってしまったわけではない。西周・春秋時代における江漢地区陶鬲の動向をおっていくと、楚式鬲はどうやら襄樊地区から荊州地区に南下したことはいえそうなのであるが、襄樊地区西周文化の様相となると、鄧国の文化をはじめとする周文化が優勢をしめ、ここに楚文化

の痕跡を求めることは不可能であると思われるからである。多くの研究者はしたがって、襄樊地区以外の場所に楚式鬲の起源地を求めようとしているのであるが、その候補地として、他ならぬ丹陽の最有力候補地丹江流域が注目されているのは、理として当然であろう。

丹江は、秦嶺山脈に発源し、商洛市商州区（旧商県）・丹鳳県・商南県・浙川県と東南流して丹江口市で漢水に流入する河川で、古来から陝西・湖北・河南をつなぐ重要な水路である。丹江流域の楚文化考古といえば、なんといっても浙川県の南方、丹江口ダムの建設にともなう考古発掘によって出現した多数の楚墓であろう。下寺・和尚嶺・徐家嶺・長嶺・吉崗・楊河などの楚墓群がそれであり、周知のようにその華麗な青銅器の出土がとくに注目を集めている。丹江口ダム楚墓群の存在とその大量の出土文物は、この一帯が楚国の一中心区であったことを示しているのである。もっとも青銅器の出土はめざましいものがあるものの、陶鬲の出土はかならずしもはかばかしくなく、楚式鬲の研究者にとってはいわば隔靴搔痒の状況が続いていたのであるが、近年すこしずつではあるけれども楚式鬲の出土がみられるようになってきている。浙川県の毛坪から溯って、商南県の湘河鎮・過鳳楼、丹鳳県の商邑・鞏家湾といった丹江沿江の遺跡からの出土がそれであり、その大要は2001年秋に開催の四省楚文化研究会第七次年会で公表された（楊亜長・王昌富・曹璋「近年来陝西境内新發現的楚文化遺存」『楚文化研究論集』第五集）。

まず春秋楚式鬲をかかげておこう。図5は商邑出土の春秋楚式鬲、図6は湘河鎮出土の春秋楚式鬲である。前者が60度タイプの短足楚式鬲、後者が52度タイプの典型的な楚式鬲であることが一見して見てとれよう。前者は商邑遺跡 — のちに商鞅の封邑となるあの商邑である — が楚国の領有下にあった時代の楚墓からの出土なのであるから、まぎれもない楚文化の遺物であり、60度タイプの陶鬲が楚式鬲であることはここにも示されているのである。その他、過鳳楼からも出土しているとの情報を商南県文化館から直接えているし、浙川県では毛坪以外の場所からも出土しているとの情報を、やはり浙川県博物館から直接えている。

正式の報告が公表されている例が少なく、全面的な統計ができないのは残念であるが、春秋時代の丹江流域は基本的に楚国の領域であったのであるから、今後出土数はますます増加することであろう。

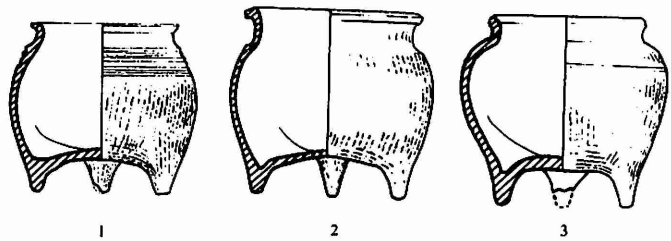


図5 陝西省考古研究所・商洛市博物館『丹鳳古城楚墓』（2006年・三秦出版社）図一一八。

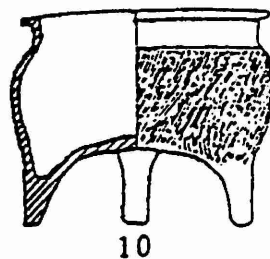


図6 商洛地区考古組「丹江上游考古調査簡報」（『考古与文物』1981年3期）。

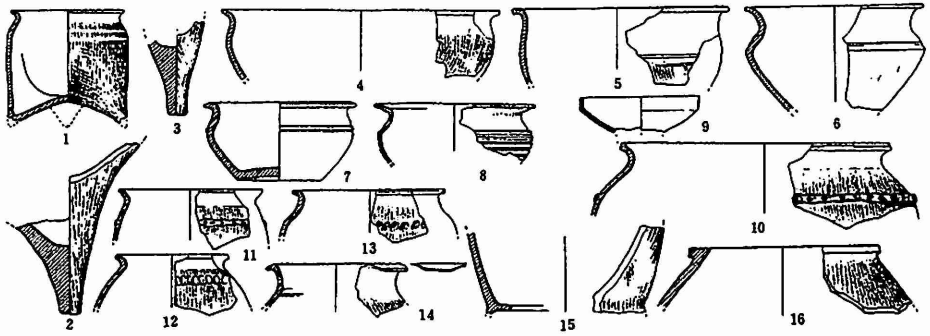


図7 陕西省考古研究所・商洛地区文管会「陕西省丹鳳県鞏家湾遗址発掘簡報」(『考古与文物』2001年6期) 図一二。

ではさて、西周楚式鬲はどうであろうか。丹江流域における西周楚式鬲出土の最初の消息は、おそらく陕西省考古研究所・商洛地区文管会「陕西丹鳳県鞏家湾遗址発掘簡報」(『考古与文物』2001年6期)であろう。この簡報には西周楚式鬲が出土したとのニュースとともに、図7のような図版が掲載されている。1の陶鬲が典型的な周式鬲であるのに対して、2・3の鬲足は純然たる楚式鬲のそれである。したがってもしこれが西周のものであるならば、まさしく西周楚式鬲の現物となるわけであるが、しかしなにせこの二本の足だけでは、時代を判定することはそうとうに困難である。商洛博物館の王昌富氏らは西周と考えているのであろうが、何ともいえないのではなかろうか。2001年四省楚文化研究会第七次年会の報告記録をみても、丹江流域の西周楚式鬲についてははっきりした情報は無い。目下の資料状況では、確実な例をあげることができないというのが実情であろう。

ただ可能性がないというわけではない。というのも2007年2月に商洛博物館を訪問した際に工作室で実見した、過鳳楼出土の陶鬲が存在するからである。一応の修復が完了したという4件をみせていただいたのであるが、典型的なものにくらべてやや足が短い、いずれも楚式鬲である。そのうちの素人目にももっとも古そうな1件について、王昌富氏は西周のものであるとはっきりいわれた。二日後に浙川県博物館を訪問して保管庫の陶器を見させていただいた際にも、王氏のいう西周楚式鬲ときわめてよく似た陶鬲にでくわしたが、館員によるとやはり西周のものであるということであった。そのでの陶鬲を西周楚式鬲とみるのは、丹江流域の現地考古工作者にとって、常識となっているらしいのである。王氏らの判断がどれだけの支持をうるができるかどうかは、今後の出土数の増加にかかっているであろうが、西周時代の丹江流域に楚式鬲が存在した可能性は、そうとうに高いであろう — 王氏たちのいうその楚式鬲は、52度タイプより60度タイプに近いものである —。

公表されているサンプルがほとんどない状態のなかで、憶測はさげねばならないが、丹江流域が楚式鬲の起源地の一つである可能性が趨勢としては高まっているというのが、現在の資料状況であるといつてよいと思う。当面は過鳳楼の正式報告が公表されるのをまつしかないというものである。

二 県遼瓦店子遺跡の発現

三峡大ダムの建設が世紀の大プロジェクトであったことはいうまでもないが、それにやや遅れてはじまった南水北調計画も、やはり世紀の大プロジェクトであることはいうまでもない。そして、三峡大ダムによる水位上昇を前にして実施された水没区の発掘・調査・保存が一大考古プロジェクトなら、南水の取水庫である丹江口大ダムの水位上昇を前にして実施された水没区の発掘・調査・保存も一大考古プロジェクトなのである。

丹江口大ダムの加高工事にともなって水位が上昇するのは、丹江と漢水の二つの河川であり、したがって発掘・調査・保存の工作は丹江側（河南省側）と漢水側（湖北省側）で並行して実施されている。このうち、後者の湖北省側では湖北省文物考古研究所をはじめとするいくつかの学術機関が丹江口市と鄖県・鄖西県・武当山風景区の各遺跡で分担して工作にあたり、遺跡と遺物を次々と発現せしめている。その成果の一部は、早くも2004年に王紅星主編『尖封的瑰宝 — 丹江口水庫淹没区文物図珍』（湖北美術出版社）によって公表されているし、2007年7月には十堰市博物館に付設された湖北南水北調博物館が開館して、一般の参観にも供されるようになってきている。発掘・調査が実施された遺跡のなかでもっとも有名なものは、道教の聖地武当山遇真宮西宮遺跡であろう。世界遺産にも登録されている建築群の一つであり、次の段階としてこれをダム庫水位の上昇からどうやって保護するか、専門家の検討が進んでいるようである。

楚国の遺跡や楚文化の遺物も、当然のように各地から大量に発見されており、2007年1月には、その最初の考古報告を含んだ南水北調中線水源有限責任公司・湖北省移民局・湖北文物事業管理局編著『南水北調中線一期工程文物保護項目湖北省考古発掘報告第1号：鄖県老幸福院墓地』（科学出版社）が刊行された。そこには後漢の磚室墓・宋代の磚室墓とともに、戦国楚墓30基の発掘・調査報告が載せられている。以降2号、3号と刊行されていくなかで、楚文化考古の報告も逐次詳細に公表されていくであろう。ところが一方でそれとともに、湖北省文物局が『湖北省南水北調工程重要考古発現Ⅰ』（文物出版社・2007年11月）を編纂して、鮮明なカラー写真とともに丹江口市・鄖県各遺跡の発掘概要と主要な成果を広く公開しており、研究者のやみがたい要求に迅速に応えている。遺跡ごとに並べられたそれぞれの文章は、墓葬や遺物の実測図をともなった正規の考古報告ではないけれども、しかし個々の遺跡・遺物ごとの考古資料としての価値を判定するのに、まずは十分な内容をもっているといわねばならない。そのなかには、今問題としている楚式鬲が出土した遺跡がもちろんいくつか含まれており、楚式鬲の起源地探索に新たな資料を提供してくれているのである。取り上げられている35箇所の遺跡のなかから、楚式鬲の写真が掲げられている遺跡をピックアップすると次のようになる。

- ① 丹江口市彭家院遗址
- ② 丹江口市薄家湾遗址
- ③ 鄖県青龍泉遗址
- ④ 鄖遼河店子遗址
- ⑤ 鄖楊家崗遗址（鬲足のみ）

- ⑥ 鄖瞿家湾遗址
- ⑦ 鄖鯉魚嘴遗址
- ⑧ 鄖白鶴觀遗址
- ⑨ 鄖上宝蓋遗址

この他にも写真は載せられていないけれども、出土が伝えられている遺跡があり、楚式鬲出土の遺跡が10箇所をゆうに越えることはまちがいないであろう。

時代は東周と判定されているものがほとんどで、確かに兩台山や趙家湖の春秋戦国楚式鬲とみまちがうほどである。それも52度タイプの典型的な楚式鬲が多く、春秋戦国時代、この一帯が楚国の領域にして楚文化の占領区であったことを如実に示しているのである。

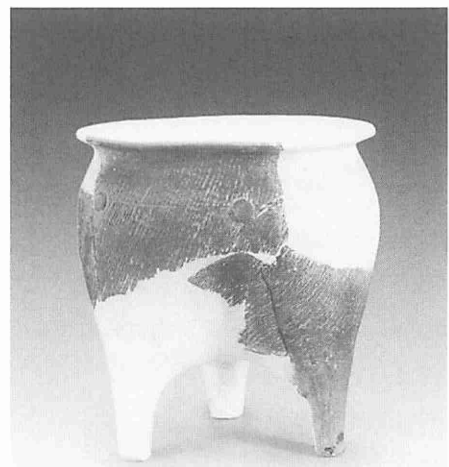
では西周の楚式鬲はどうであろうか。実はここ1年半あまりの間、鄖県遼河店子遗址（④）の発見によって、楚文化の生成時期が従来の理解よりも大幅にさかのぼり、あるいは西周中期よりも以前である可能性が高まったとのニュースが、さまざまなメディアによって時おりもたらされていたのであるが、はたしてこの『重要考古発現Ⅰ』を開いてみると、陶鬲17件のなかに3件の西周陶鬲が含まれており、1件の写真は1足が前面にあって角度上判定しにくいものの、残る2件はまぎれもない楚式鬲、しかも52度タイプの典型的な楚式鬲にきわめて近い楚式鬲である（図8）。この西周楚式鬲の存在をもって、発掘者たちが鄖県一帯における楚文化の生成時期を西周中期ごろと考えているのにちがいない。形のよい西周楚式鬲の発見を前にして、発掘者たちの感動はいかばかりであったか、察してあまりあるものがある。

この遺跡の考古学的価値は、二里头 - 殷 - 西周 - 東周の遺物がそれぞれ豊富に出土していて、文化要素の交代がかなり正確に復原できるところにあるのであるが、発掘隊のリーダーであり報告文の執筆者である武漢大学王然教授は、その文化交代のありさまを次のように整理している。

二里头時代、この地域の文化は陝西省東南部の同時期文化の影響を受けるとともに、中原の二里头文化とも一定の関係をもっていた。殷代中期の文化は中原の典型的な殷文化とほと



西周陶鬲(H267:2)



西周陶鬲(IT1114◎)

図8 湖北省文物局主編『湖北省南水北調工程重要考古発現Ⅰ』（2007年・文物出版社）「鄖県遼河店子遗址」。

んど同じである。殷代晩期・西周初期の文化は地域独自の様相を呈しているが、西周中期に周文化が侵入して典型的な周文化が急速に発展する。西周中期から東周までは、楚文化の範疇に属する文化圏であった。

実はこの『重要考古発見Ⅰ』は、2008年10月湖北省博物館を参観した際に胡雅麗氏から恵与されたのであるが、一読し終わらないその夜のうちに、ほかならぬ王然氏と面談して説明を受けるといふ、思いがけない幸運に恵まれることができた。その時の王氏の説明は要するに次のようなものである。

- 一、西周中期における周文化から楚文化への交代は、周文化をになった人々のなかから自生的に楚文化が生まれたというのではなく、そもそも民族的・文化的に異なった人々の接触と相克の結果生じたものである
- 二、西周時代中期、すでに鄭県一帯に楚文化が形成されていたことは確かであり、したがって、丹江口ダム一帯が楚族の故郷にして楚文化の発生地である可能性はきわめて高い。
- 三、西周時代の楚式鬲は遼河店子遺跡以外にも、丹江口ダム一帯の各地に存在したはずである。たとえば丹江流域の商南県過鳳楼遺跡の例がそれであり、そのうち報告が出ると聞いている。丹江流域に西周楚式鬲が存在したことを疑うむきもあるが、それは過鳳楼のそれを見ていないからである。
- 四、丹陽は丹江にちなんだ地名であり、以上の理由をあわせて、丹陽＝丹淅説に従うべきである。

王氏は過鳳楼の陶鬲をみており、それが西周楚式鬲であると確信しているのである。だからこそ、遼河店子楚式鬲のいくつかを西周楚式鬲と判定したのであろう。このことを同じ武漢大学の徐少華教授に質してみたところ、王氏の意見は基本的に正しいと断言され、過鳳楼の陶鬲を実見することを強く勧められた。2007年2月商洛博物館や淅川博物館を訪問した際に、当地の研究者が西周楚式鬲だという陶鬲をもっとじっくり見るべきであったと後悔してみても、あとのまつりというものである。

鄭県遼河店子遺跡出土のこの西周楚式鬲が、小論で紹介しようとした、丹陽＝丹淅説の有効な新証拠なのである。いつかは発見されるはずの予定であったろうが、丹江口大ダムの水位上昇がその予定期日を早めたことはまちがいない。こと楚国歴史地理に関するかぎり、この西周楚式鬲の出現は、現段階における丹江口大ダム考古最大の成果ということができであろう。これで丹淅説の正しさが完全に証明されてしまったわけではもちろんないけれども、その正しさの可能性が大きく前進したことは確かであると思う。今後は過鳳楼考古報告のなるべく早い公表を望むとともに、丹江口大ダム一帯で新たな西周楚式鬲が出現することを、期待をこめてまたねばならない。

ところでもし丹淅説の正しさをより追求していくとすると、他にどのようなことが問題になるであろうか。この点に若干ふれておくことにしよう。

すでに春秋楚式鬲が出土しており、あるいは西周楚式鬲が出土しているかも知れない丹江流

域の遺跡が存在する村落は、上流から順に丹鳳の鞏家湾・商邑、商南の過鳳楼・湘河鎮、淅川の毛坪であった（図9）。いずれも丹江の流れに面した、河港をもつ村落である。次に図10は『重要考古発見Ⅰ』がかかげている「南水北調湖北淹没区文物点分布図」であるが、そのかなりの数が漢水に面していることが了解されるであろう。遼河店子遺跡はその一つであり、まさしく漢水の流れを望む村落に存在しているのである。

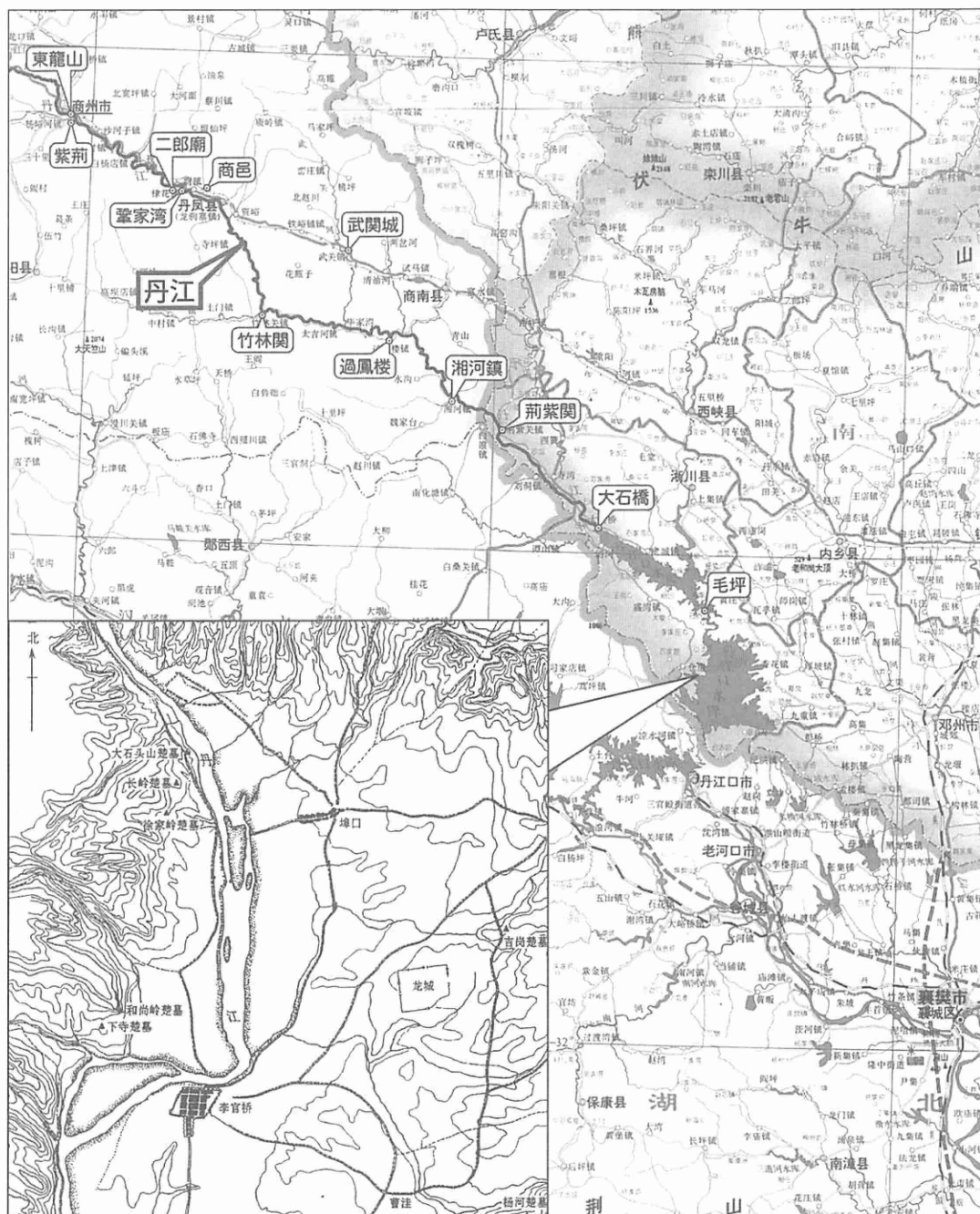
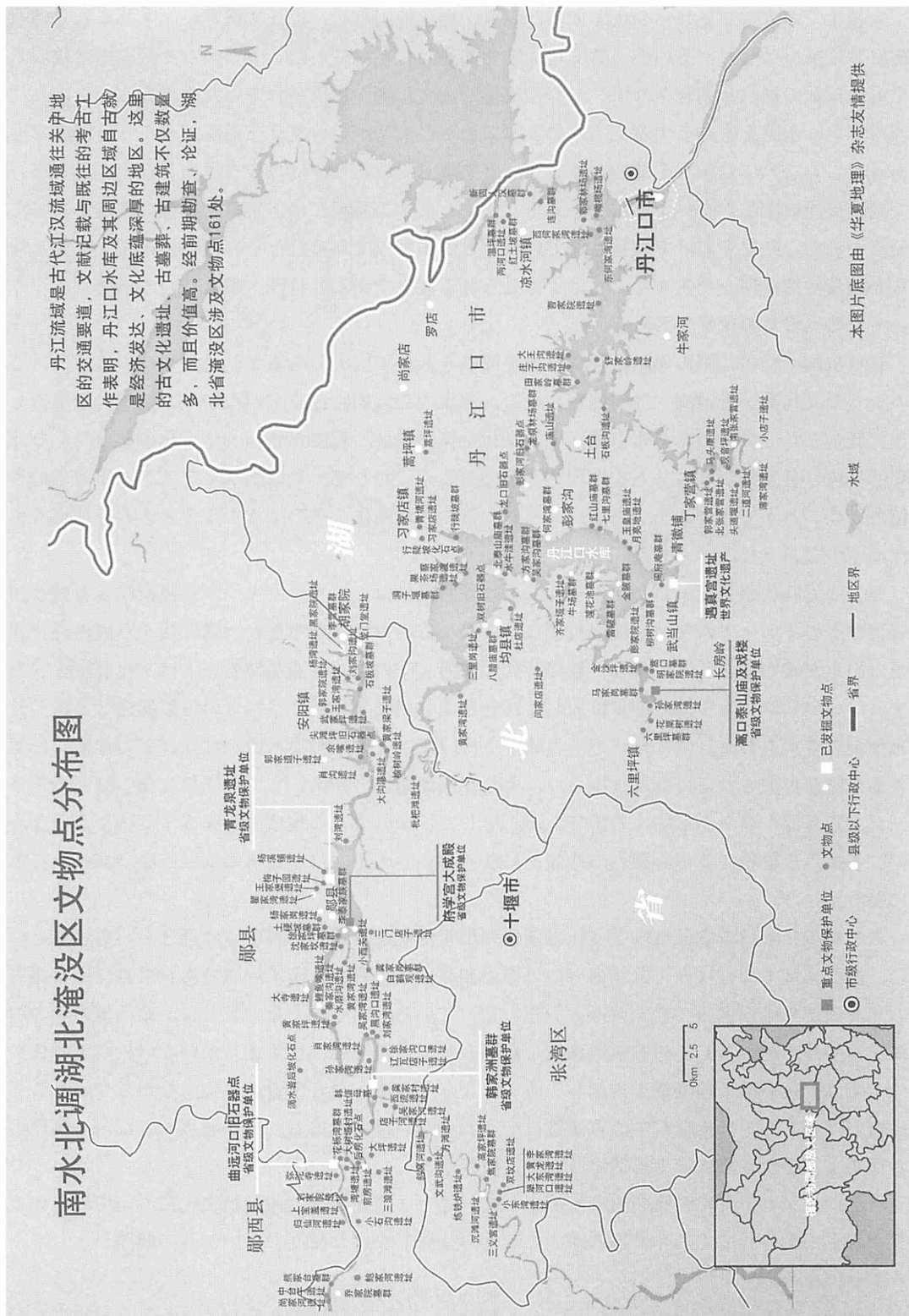


図9 谷口満「続・楚族の故郷を探し訪ねて — 丹江=石泉ルートを行く —」（東北学院大学『アジア流域文化論研究Ⅲ』「旅程図」。

南水北调湖北淹没区文物点分布图

丹江流域是古代江汉流域通往关中地区的交通要道，文献记载与既往的考古工作表明，丹江口水库及其周边区域自古就是经济发达、文化底蕴深厚的地区。这里有大量的古文化遗址、古墓葬、古建筑不仅数量多，而且价值高。经前期勘查、论证，湖北省淹没区涉及文物点161处。



本图片底图由《华夏地理》杂志友情提供

图10 湖北省文物局主编『湖北省南水北调工程重要考古发现 I』（2007年·文物出版社）「南水北调湖北淹没区文物点分布图」。

今日までの考古知見に示されているとおり、春秋戦国時代、丹江や漢水に面するこれらの遺跡は楚式鬲をはじめ、その他の楚文化文物を共通もっていた。そういった共通の文化要素をもつ複数の拠点が結合されて、一つの地域的な文化圏が形成されていたのである。この文化圏はまた、水路を中心とする交通路によってヒトとモノが行き交う交通圏でもあり経済圏でもあった。ちなみに遺跡と遺跡の距離をざっと整理してみると、ばらつきはあるが、一日の航行で到達可能な距離が多いようにも思える。ヒトとモノの移動には、集積と中継の機能をもった拠点が適切な距離をおいて配置されていることが不可欠であるし、その拠点到人々が集住し何らかの政治的機関が発生することはよく見られる現象である。丹江・漢水ぞいの遺跡は、そういった拠点集落の後身であろう。

春秋戦国時代の楚国の領域、楚文化の範囲はきわめて広大であるが、それぞれの地域にはこのような文化圏・交通圏・経済圏が存在し、多少の地域的特色をもちながら、楚国の王権のもとに統合されていたのである。楚国・楚文化全体の領域・範囲が楚国・楚文化のマキシムな地理的単位、各遺跡がミニマムな地理的単位であるのに対して、地域圏はミディアムな地理的単位ということができようか。丹江口大ダム一帯の地域圏は、そのようなミディアムな地理的単位の一つであったわけである。

さて西周時代の楚国・楚文化の全体的な地理的規模は、つまりマキシムな規模は、春秋戦国時代のそのミディアムな地域圏の規模にほぼ重なるのではなからうか。過鳳樓からの西周楚式鬲の出土が確かであるとすると、西周時代、遼河店子の人々と過鳳樓の人々は文化要素を共有する二つのミニマムな地理的単位として存在していたはずであり、両者の位置関係と遺跡の分布状況を考えあわせれば、丹江中下流域から丹口市・鄖県の漢水流域にかけての地域に一個の地域圏が形成されていたと推測され、それが西周楚国の領域にして西周楚文化の範囲のイメージとして浮かびあがってくるのである。そして、そのような地域圏を構成する各拠点のなかで、各拠点を統括する中心拠点の機能をになっていたのが、ほかならぬ都城丹陽であったことになろう。

この地域における春秋戦国楚文化青銅器の出土状況をみると、質といい量といい華麗さといい、丹江流域であれば淅川県城南方の下寺や和尚嶺や徐家嶺、漢水流域であれば丹江口市西方の北泰山廟や鄖県西方の番家院などがきわだっている。おそらくその付近に、政治権力者の居住する中心的拠点としての春秋戦国城市が存在していたことはまちがいない。西周時代については、拠点城市の位置を推測しうるような、そのような考古資料は残念ながら今のところはないけれども、今後発現する可能性はそう低くないはずである。もし発現すれば、丹陽探索の作業は、またさらに一歩前進することになろう。

丹江口大ダム一帯に丹陽の痕跡を探索していくと、西周楚国と西周楚文化について以上のような想定がえられてくるのであるが、ここから検討しなければならない二つの問題が生じてくることになる。

一つは、この地域圏の中心的集団である楚族が、のちに楚国の主権をになう王室種族になぜなりえたかという問題である。西周時代、周王朝の支配をうけつつも、こういった地域集団は

河南・陝西・湖北・湖南・四川・安徽など、春秋戦国時代に楚国の領域となる広大な範囲の各地域に存在していたはずである。彼らが何らかの政治的行動をおこすとすれば、それは周王朝の支配力が弛緩した時であったはずであり、西周中期とか東遷前後というのが、その機会の時であったろう。ではなぜ、数多い地域集団のなかで、とくに丹江口大ダム一帯の地域集団が突出して強勢を發揮し、そのなかの楚族が楚国の王室種族にまでのぼりつめることができたのであろうか。軍事的優勢・経済的優勢といった理由がまず浮かぶであろうが、もっと優勢な地域が他に存在した可能性が高く、これが第一の理由とはとうてい考えられない。そもそもある集団が強勢になって国家の支配集団になっていくのは、偶然の理由によるものが多く、必然的な理由をさがし出すことはそうとうに困難であろう。

そのなかにあって、もし一つだけ何か理由をあげるとすれば、多くの研究者が想定しているように、ここが異なった民族、異なった文化、あるいは陸運と水運の交差点であることからくる、居住民の進取の気質ではなかろうか。この一帯は大きくいえば、周系民族と南方系民族の交差点であり、周族や楚族、あるいはのちの巴系民族の一種が定住と移住を繰り返しながら交錯し、その過程で、殷系文化をうけつぐ伝統的な文化、周文化、洛陽一帯を經由して西進してくる東方系の文化、北上してくる大溪文化・屈家嶺文化以来の長江流域南方文化が交接して、相克と融合を繰り返す地域であった。おそらく長江上流の羌系民族・羌系文化の漢中地区を通過しての流入も、可能性の一つに数えなければならぬであろう。また丹江流路の浙川県荆紫関鎮や丹鳳県城龍駒寨鎮などは後世まで陸路・水路の転換点であり、西周時代にもそういった転換点がいくつか存在したにちがいがなく、そこには当然陸運に長じた人々と水運に長じた人々の交流と相克が見られたはずである。

このような地域には、進取の気質に富んだ異才が生まれることが多いのであり、荆紫関鎮付近あるいは南陽付近出身と伝えられる范蠡や、少し東ではあるが漢水支流白河流路の水陸転換点である西鄂出身の張衡などは、その好例である。考えてみれば、范蠡が丹江流路水陸転換点の荆紫関鎮付近か、あるいは白河流路の水陸転換点南陽付近の出身かという伝説はきわめて興味深い。ここから丹江・白河を下って漢水に入ればすぐに襄樊である。そこからは、それこそ水量豊富な大河をた悠々と航行することが可能であり、漢水を下って漢口で長江に乗り、東路長行して呉・越に到達する。長江の下流からは、邗江などの内陸水路を使うか海岸沿いの海路を使うかのちがいはあるが、ともかく山東半島まで航行可能である。そこからも済水などを使って西行することが可能であり、こうして范蠡の終焉地と伝えられる定陶に到達する。荆紫関鎮や南陽から定陶に行くには、東へ向かえば距離は短いが、基本的には陸路をとらねばならない。これに対して、この南方を大きく迂回するルートは、距離は陸路とは比較にならないほど長いが、基本的には水路を航行すればよいのである。范蠡の出身地荆紫関鎮付近や南陽付近はその西の出発点であり、終焉地定陶はその東の出発点であった。おそらく范蠡についてのさまざまな伝説は、この南方大水路のあちこちで生成されたにちがいがなく、呉越抗争での活躍を伝えるそれがその一つであることはいうまでもない。そして、彼の出身地がその南方大水路上のどこでもなく、西の出発点であったという伝説は、こういったいわば国際的に活躍する人物の

故郷として、異なる民族の交差点・異なる文化の交差点・水陸の転換点こそがふさわしいという、一種共通の認識を背景に生成されたのではなからうか。

荊紫関鎖や南陽にあって、異質なものに相互にふれることによって培われたその進取の気質をもって、南方への進発を試みようとしている范蠡の姿は、丹江口大ダム一帯にあって、やはり同じ進取の気質をもって、南下して政治的・経済的勢力を伸長させようと企てている楚族の姿に、どうしても重なるのである。気質といった漠然としたものを歴史の必然的理由として考えるのは危険であるけれども、楚族がなにゆえ他に抜きんでて強勢になりえたかを考える、一つの手がかりとすることは許されてよいと思う。

もう一つ次の問題は、丹江口大ダム一帯の楚族が西周～春秋とどのような経路をとって南方へ展開していったかという問題である。まず襄樊地区へ南下したことはまちがいない。問題はそれ以降の経路で、襄樊から棗陽・随州という、いわゆる随棗走廊か、あるいは襄樊から湖北西部の山地ぞいに南漳・荊門・当陽・荊州という、荊山東麓路線かは容易に想像がつくのであるが、はたしてどちらであろうか。西周時代における随棗走廊の文化状況を考えれば、前者でないことはまずまちがいないであろう。なぜなら、そこは曾（随）をはじめとする諸国が分布する周文化の占領区であり、楚族がここに侵入していくことは困難であったと思われ、事実楚文化の痕跡がほとんど留められていないからである。南陽から白河に乗って襄樊に下り、そこから随棗走廊に乗って武漢に至るルートは、南北往来のもっとも重要な路線であった。周王朝がこの路線の掌握をはからないわけがなく、姬姓諸侯はもとより王朝に服属する異姓諸侯を配置して、その支配を強化しようとしたであろう。その配置された諸侯のいくつかは周室東遷以後にも残存していたらしく、曾（随）・鄧・唐などが文献資料・考古資料の双方によって確認されている。楚族はこの南北ルートと接触しつつも、基本的にはおそらく避けながら南下したに相違なく、とすれば南下のルートは荊山東麓路線をおいて他はなかったはずである。行き着く先は、当然長江中流の要衝荊州であり、春秋以降の楚国の腹地が、襄樊地区でもなく随棗地区でもなく、また武漢地区でもなく荊州地区であったのは、西周時代におけるこの楚族南下路線の地理的意味によって決定されたのである。

なおこの問題に関しては、笹浩波「由楚文化遺存的分布特点看早期楚文化的中心区域」（楚文化研究会編『楚文化研究論集』第七集）が興味あるデータを提供している。笹氏は春秋以降の楚国の領域を漢水中上游山地区・襄宜平原及随棗走廊区・沮漳河及江漢平原区・大別山低山丘陵区・鄂南幕阜山丘陵区・峽江地区に分け、それぞれの区域の西周から戦国の楚文化遺跡数を並べてその推移を考察しているのであるが、そのデータは次のとおりである。

	総数	西周	東周	戦国
漢水中上游山地区	6 2	3 4	2 7	1
襄宜平原及随棗走廊区	3 5 6	2 3	2 2 5	1 0 8
沮漳河及江漢平原区	4 3 9	1 5 9	2 6 4	1 6
大別山低山丘陵区	2 3 3			
鄂南幕阜山丘陵区	9 1 4			
峡江地区	7 7	6	7 0	3

笄氏は『中国文物地図集・湖北分冊』から、規模10万㎡以上・10万～1万㎡・1万㎡に区分して遺跡数を収集・整理し、規模ごとの遺跡数をかかげているが、上にあげたのは規模を無視した三規模遺跡数の総和である。簡略に従ったためであるが、せっかく笄氏が規模ごとの数値をあげているのであるから、本来ならば規模ごとの差異も考慮しなければならないであろう。また氏は総数表と西周表については“遺址分布表”という表記を使用し、東周表と戦国表には“楚文化遺址的分布”という表記を使用しており、どのような意図があるのか、本来ならば『湖北分冊』とそれぞれの遺跡の報告を見比べてみる必要があるだろう。それに遺跡数といっても、やはり単位面積あたりの密度を詳細に算出してみる必要があると思うが、笄氏がこれにどれほど考慮をはらっているのかも、今一つははっきりしない。

しかし、上にあげた簡略なデータだけでも、笄氏のいわんとするところを十分に示すことができると思う。笄氏の主張は、第一に西周・東周を通じて荊州地区を中心とする沮漳河及江漢平原区が楚国の腹地であったが、戦国に入ると襄宜平原及随棗走廊区にしたいに重心が移り、むしろそこが政治的・文化的腹地の様相を呈するようになったこと、第二に沮漳河及江漢平原区は、すでに西周時代に楚国の腹地となっており、故郷である漢水中上游山地区からここに南下したのは、おそらく西周中期ごろであること、この二点である。第二の指摘は、楚族の南下路線についての先の想定にまさしく対応しているであろう。

ところで、西周中期に楚族がすでに沮漳河及江漢平原区に到達していたと笄氏が考える理由は、荊州地区から出土する西周中期の陶鬲が楚式鬲の直接の前身であるとみるからなのであるが、はたしてそう判定してようかどうか器形上問題である。荊州地区出土のもっとも古い楚式鬲としては、一期一段＝西周晩期に編年されている、当陽趙家湖の小口楚式鬲をあげておくのが、今のところ無難であろう。このことは、少なくとも西周晩期には楚族がすでに当陽一帯に到達していた可能性の高いことを示唆している。そうであるとする、当陽東南至近の荊州にも西周晩期、あるいはそれを下ることそう遠くない時点で到達し、この長江中流の要衝に拠点を築いていたと考えねばならない。その拠点が、春秋戦国時代の楚国の都城郢都＝江陵紀南城の前身であったことになるのではなかろうか。

丹江口大ダム一帯が楚族の故郷であったという前提に立つと、以上のような問題が自ずから生じてくることになる。丹陽＝丹淅説の検証には、こういった問題の検証も必要なのである。いずれ考古資料が増加して、検証が進展することを期待したいと思う。

おわりに

楚文化というと、あの華麗な青銅器や漆器をもつ、戦国時代のいわゆる典型楚文化が必ず思い起こされてくる。しかし、春秋時代の楚文化となると、これこそが楚文化独自の要素だと可視的に判定できるものは実はきわめて少ない。ましてやそれ以前の西周時代ということになると、楚文化の要素をあげることはほとんど不可能な状況なのである。そのような資料事情のもとで、西周時代の楚国の都城丹陽と西周楚文化の発現地をあえて探索しようとするのであるから、作業も結論もどうしても不安定なものにならざるをえないであろう。この不安定さを十分自覚するとすると、資料としては楚式鬲しかなくなってしまうのである。しかもその楚式鬲においてすら、どの陶鬲まで楚式鬲に含めるかという点では研究者の意見は必ずしも一致していないのが現状である。このような状況のなかで、誰もが楚式鬲と認めざるをえない西周楚式鬲が鄭県遼河店子遺跡から出土したのであるから、それは一つの画期的事件であるといつてよいと思う。

昨年10月武漢大学珞珈山荘で王然教授から直接情報を提供していただいた際、王氏はパソコンを持参され、遼河店子遺跡出土遺物の写真を数多く見せて下さった。その時の気持ちは、おそらく感激というのがふさわしいであろう。その感激がさめないうちに、王氏の好意に応じて、以上の紹介文を草することにしたわけである。